

株式会社 奥井組



「水滴^{したた}りて石^{うが}を穿つ…」 — 微力を積み上げて大事を成し遂げる —

自社の技術を追求し、「ワンストップサービス・テクノソリューション」を実現

運輸や物流、機工、プラント建設を主軸とし、時代の変化に応じてクレーンリースや環境などの新事業でも躍進を続ける奥井組。独自技術による建設機器や巨大タンクなどの大型重量品の輸送や据付をはじめ、新幹線や鉄道車両、旅客機YS-11の輸送も手掛けるなど、業界でも大きな注目を集めている。さらに、種子島までのロケットブースターの輸送を一任されるなど、国策の一助も担っている。人と機器のトータルサポーターとして50年以上の歴史を刻む中、常に技術を追求して他社にない付加価値を提供し、挑戦者として邁進する奥井利幸社長にお話を伺った。



株式会社 奥井組
代表取締役社長

おくい としゆき
奥井 利幸 氏

LEADER'S PROFILE

1954年（昭和29）4月生まれ。1977年日本大学理工学部卒業後、入間市役所下水道課に入職。土木技師として上下水道の設計に携わる。1982年に（株）奥井組に入社し、新規顧客の開拓に従事。奥井正夫会長が築いた経営路線から多角的な事業を展開し、独自路線を開拓して飛躍的な成長を遂げる。2005年に同社代表取締役に就任。現在に至る。

各事業部が連携した「ワンストップ」の事業展開を掲げ、時代の変化に柔軟に対応している。座右の銘は、「水滴りて石を穿つ」。社長就任の際は、この言葉を企業理念とした。

オート三輪一台で基礎を築く

— 御社は2015年に設立50周年を迎えましたが、創業まで遡ると60年以上の歴史があります。奥井正夫会長は若くして起業されましたが、創業当初について伺いできますか？

設立は1966年（昭和41）ですが、'54年に現会長の父が都内の足立区で奥井建輸を創業したのが当社の始まりになります。

9人兄弟の末っ子として富山に生まれ育った父は、高等小学校を卒業後、大阪の自動車

修理工場に勤めます。戦後の復旧に向けて物資の輸送需要は増加していますが、GHQがトラックや乗用車の生産を制限していたため、整備を繰り返しながら乗り継ぐしかない時代、自動車修理工場には整備や解体、組立などの依頼が相次ぎ、新人の父も業務の中で車に関する知識や技術を体得していったのです。

輸送車が不足する中で活躍したのが「オート三輪」です。修理工場でもオート三輪の修理は多かったそうです。修理しようにも重くて持ち込めなく、また道端に乗り捨てられて廃車になった車のエンジンやパーツがあちこ

ちにあったようです。そこで父は3本の木材とロープで三又を組立て、滑車の原理を利用して重量物を引き上げて、自分のオート三輪で運んだのです。まさに現代のクレーンと言えますね。

——戦後の物のない時代に創意工夫で乗り切った知恵や機転は、今の御社にも通じる部分がありますね。

大阪の修理工場で2年の経験を積んだ後、父は東京秋葉原の日通で、関東一円のドライバーとして勤務します。建設機器メーカーの小松製作所（現KOMATSU）の担当となりますが、配達品の多くは、ブルドーザーの巨大なキャタピラをはじめ、手動輪や転輪などの鉄製の重量品ばかりでした。

普通の人なら尻込みするような重量物ですが、ここでは大阪時代の経験が大いに役立ったようです。重量物を運べる人材がほとんどいない中、各地の工場へ届けてくれるドライバーは貴重な存在で、小松製作所からは早くから目をかけられていたようです。

——建機輸送の需要の高まりと、先代の知識や技術、そして人望により、多くの人との繋がりが成長に結びついたのでしょうか。独立されるのはその頃ですよ。

小松製作所からの大きな仕事に加え、配送の依頼も山ほどある。運送の需要はますます伸びるだろうと、'54年の6月、足立区にドライバー兼社長として奥井建輸を立ち上げます。車両は日通の退職金で購入したオート三輪一台。私が生まれたのが同年の4月です。独立の背景には、一家の大黒柱としての決意もあったのではないのでしょうか。

さらに戦後の日本の復興から高度経済成長期にかけて、加速度的に公共事業が整備されていきます。特に東京オリンピック開催に向けて、新幹線や高速道路などの建設ラッシュが土木建設業界に追い風となる中で、奥井建輸も大手ゼネコンが手掛ける建設現場に出入りするようになります。

■日本の復興とともに成長した奥井組



終戦直後、裸一貫で社会に飛び出した奥井正夫会長は、物のない時代に持って生まれたバイタリティと創意工夫で乗り切り、現在の奥井組の基礎を築いた。

時代の先を常に見据えた奥井会長は、1970



若き日の奥井正夫会長
と相棒のオート三輪

年に初の海外視察を敢行して以来、数回、先進例を学ぶために海を渡り、知識を深め、技術を体得した。

オート三輪一台からスタートした小さな会社は、今や飛行機やロケットブースターをも輸送する唯一無二の会社へ成長を遂げたのである。

父は建設機械にも精通し、操作もできたため、ドライバーだけでなく現場の重機操作のオペレーターとしても重宝されたのです。忙しい毎日が続きますが、大手ゼネコンだけでなく、地方の建設会社や中小企業の下請け業者など、建設業界のネットワークが構築でき、活躍の場を広げていったのです。

——入間市の広大な敷地に本社事業部はじめ、トラストセンター、車庫を構えていますが、入間市とはご縁があったのでしょうか？

創業時、足立区の北千住に自宅を兼ねた事務所を構えていましたが、建設現場の仕事も増えてきました。そこで、建設機械をそのまま輸送できる大型のトレーラも必要でしたし、トラックや建設重機も増えてきました。そこで、車庫スペースが必要となり、埼玉県入間市の国道16号線にアクセスし易い900坪の土地を購入したのです。

その後、建設工事が本格化するようになると、車庫用地内に新たな事務所も開設します。'66年2月に有限会社奥井組を設立し、その後、次々と事業を拡大し、'71年7月に機械工事を主体とする株式会社としてスタートを切ります。

奥井組の技術が結集! 「ワンストップサービス・テクノソリューション」

運輸・機工・物流・プラント事業をさらに発展させた人と機器のトータルサポート!
奥井組だからこそできる「テクノソリューション」

安全輸送は強力な
機材と繊細な作業
技術から



運輸事業

太陽光や遮熱塗装、
LED 照明設備など、
環境保全と省エネに
よるコスト
削減の両立
を提供



環境事業

お客様のプロジェクトに定める
最適な建機や機材を選定



建機
リース事業

必要とされる機能を
好アクセス、高効率
でご提供

物流事業



幅広いエンジ
ニアリング
サービスで
ニーズに対応

プラント
建設事業



機工事業

確かな機工技術と大型
重機で最大限の効果を



——さまざまな公共工事に携わってこられましたが、当時のエピソードなどがありましたらお聞かせください。

建設業界における東京オリンピックの波及効果は、公共工事だけでなく、石油工場建設や大型団地の宅地造成、ゴルフ場造成にまで及びました。特に当社ではゴルフ場に関しては、関東近郊のほとんどのゴルフ場の造成に関わりました。

こうした土木・建設工事には、ブルドーザーやスクレイパ、ダンプトラック、パワーショベルなどの大型の建設機械が必要になりますが、これらを全て揃えると莫大な費用がかかります。また、整備や修理などの維持費もかかります。そこで父は秘策を講じます。まず工事に必要な新車を分割払いで購入するので、ひとつの工事は長くても2年程で完了しますので、工事終了後に即売却したのです。まだまだ重機の需要が高かったため、中古でも8割近い値段が付くこともあり、中には残債以上の金額で売却でき、利益が出ることも

少なくなかったようです。

インフラ整備型の土木工事から 都市開発型の建設工事へ

——右肩上がりの成長を続けてきた建設業界ですが、公共事業が整備された後、1970年代半ばにはオイルショックや経済不況などの冬の時代を迎えますが、御社は見事にその時代を乗り越え、より一層飛躍されています。

社会インフラが整備されると、大型重機の運搬や工事などが頭打ちになることは目に見えていました。その中で父が考えたことは大型クレーンの導入でした。1970年代半ばになると、建設業界は都市開発型の建設工事へシフトしており、ビルや建物の建設には大型のクレーン車が必要不可欠になってきました。

1975年（昭和50）に父は高松市にある建設クレーンメーカーの最大手の多田野鉄工所（現：株タダノ）を視察し、移動式的大型クレーン車を購入します。そして77年4月には、クレーンとオペレーターを工事現場に派

遣する「大型移動式クレーンリース事業部」を発足させて、時代の流れに見事に対応したのです。

——奥井社長が入社されるのは、その数年後になりますね。親子2代で家業を盛り上げる体制ができたわけですね。

私はクレーンリース事業部が発足した'77年に大学を卒業し、入間市役所に土木技師として就職します。上下水道工事の技術職として設計に携わっていましたが、父から声がかかり、5年後の'82年に奥井組に入社します。

高校の頃から現場で作業の手伝いもしておりましたし、長男でしたので、いずれは家業を継ぐことは覚悟していました。しかし、父も元気で、何よりも土木技師として充実した毎日を過ごしていたので、跡を継ぐのはまだ先のことと思っていたのです。

父が一代で苦労して築き上げてきた会社です。父の強い思いもあったのでしょう。入社後は父と意見の衝突もありました。私も業績を伸ばすためには営業品目を増やし、新規顧客を獲得したいという思いがあり、今まで培ってきた機械土木の経験を活かしながら異なる業界を開拓しはじめたのです。

飛び込みで営業を重ねる日々が続きましたが、なかなか成果は出ません。そんなある日、巨大タンクが立ち並ぶ工場に飛び込んだのです。その工場は、日本容器工業株式会社（現：㈱エヌ・ワイ・ケイ）といい、国内で初めてエポキシ樹脂ライニングタンクを開発し、現在も日本酒や醤油、食酢、味噌など、食品用醸造タンクにおいて70%以上のシェアを占めるほか、樹脂ライニング技術を他分野にも拡大し、受水槽やプラント用の化工機などでも業績を伸ばしている会社でした。

きっかけは飛び込みでしたが、当社の建設機械等大型運搬の実績を高く評価していただき、取引が始まりました。ビールやワインなどの醸造タンクは超特大品輸送で、一度に何十本にもおよぶ大型注文で、次第に輸送だけ

でなく据付工事まで任されるようになりました。また、食品タンクと並行して受水槽の運搬・据付も請け負うようになり、ビルの屋上など特殊な据付場所に合わせた細かな搬入計画で対応するなど、据付技術力の向上にもつながったのです。

時代の変化に対応し、さらなる飛躍を

——建設機器や大型タンクなどの大型重量品の輸送や据付などは、現在の事業の大きな柱となっていますが、今まで輸送した中で特に珍しいものはありますか？

新幹線の構内移動や各社鉄道車両の移送、展示用のゼロ戦やセスナ機も運びましたが、中でも1997年（平成9）の国産旅客機YS-11の輸送は、記憶に残る当社のビッグプロジェクトのひとつとなりました。

■YS-11の輸送は深夜の大イベントに



1975年に生産を終了した戦後初の国産旅客機YS-11。182機が製造されたうちの1機が、埼玉県に寄贈され、所沢の航空記念公園に保存展示されることになり、奥井組がその輸送を一任された。

ロケットブースター輸送プロジェクト

陸路の平均時速は約30km。ゆっくり慎重に種子島まで片道8日をかけて輸送する。

①IHIエアロスペース富岡工場でロケットブースターを積み込み、出発！



ロケットブースター輸送用に開発された最新鋭トレーラ



輸送途中で上空架線や鉄道ガードが障害にならないように、荷台部分を特別に低くしてある。また、油圧サスペンションにより積荷を常に水平に保ち、各車両にかかる荷重も一定にたもたれるので、精密機械に影響なく郵送できる。

②東京湾に到着し、フェリーに乗船。徳島県を經由し、福岡県の新門司港に到着後、陸路で鹿児島県へ。



③鹿児島新港に到着。一般小型フェリーに乗船。小型フェリーでは荷台の低さが障害となるため、油圧昇降台車により、高さを調整して乗船する。



④種子島西之表島港に到着。種子島宇宙センターを目指す。



⑤種子島宇宙センターに到着。

さあ、夢が打ち上る！



©JAXA

入間市の航空自衛隊の基地で分解された機体を所沢市の航空記念公園まで陸送するのです。運搬するトレーラは総台数で10台以上、長さ26.3mの胴体部分は分解できないため長尺物専用のトレーラを用意し、受け架台を特注しました。トラクタヘッドも含めると全長33mにおよびます。また、噂を聞きつけた航空マニアや見物客が沿道に押し寄せるなど、まさに深夜の大輸送イベントとなりました。最難関の輸送ポイントが所沢にある西武新宿線のガードでした。橋桁と機体の隙間がわずか数センチ。無事通り抜けた時には拍手喝采が沸き起こりました。

色々なものに興味を持ち、何事にもチャレンジを

——ビッグプロジェクトといえば、1998年から20年も続くロケットブースターの輸送は御社の代表的な大型輸送品としても有名ですね。

ロケットブースター輸送のきっかけは、テレビ番組でも有名な「鳥人間コンテスト」に出場した取引先の有志チームの機体を運んだことに始まります。日頃の恩返しとして機体輸送を引き受けましたが、現地のびわ湖では、機体の構造や安全性のチェックなどで、しばらく滞在することになり、この間に日産自動車の宇宙航空事業部のエンジニアの方々と親しくなりました。毎日のように国産ロケット開発や、壮大な宇宙への夢と情熱ついて聞いておりました。

今思うと、日本航空界の重鎮であり、母校日本大学理工学部の木村秀政名誉教授との出会いや、先述のYS-11機の輸送など、もともと航空機と縁があったのかもしれませんが。正式なブースター輸送の話をいただいたのは1997年（平成9）でしたが、宇宙開発事業という国策の一助となるのは奥井組としても非常に名誉なことでしたので、迷うことなくお引き受けしました。それから約20年、輸送したロケットブースターは現在まで120本を超えております。

——社長は入社以来、事業の多角化に着手し、現在は各事業が御社の主要な柱として成長されていますが、将来の展望などをお聞かせください。

時代が変化し続ける中、お客様のニーズも多様化しています。当社では様々な輸送ニーズに対応し、最も歴史のある「運輸事業部」、保管・管理を徹底した「物流事業部」、安全で効果的な重量物の搬入・据付を実現する「機工事業部」の3事業部を中心に、プラント建設事業や建機リース事業などの拡充を図ってまいりました。

将来的には、運輸事業は維持しつつ、物流とプラント機工を中心とした事業を展開したいと考えています。本社にある入間トラストセンターや狭山日高IC近郊にある日高トラストセンターはともに圏央道や首都圏主要道路からアクセスもよく、物流拠点としては最適な位置にあります。このため、地域と密着した物流ネットワークを構築しております。そして確かな機工技術と大型重機でお客様のニーズに応えるべく、元請工事の比率を高めていきたいと考えています。

そのためには、これからも現場管理・品質管理・社員教育などを徹底して行う必要があると思っています。

——最後になりますが、社員の皆様に期待すること、常日頃おっしゃっていることはございますか？

■安心安全な水耕栽培野菜を提供

奥井社長の趣味が高じて水耕栽培に着手。12,000坪にも及ぶ工場の敷地内には、井戸水や廃材もあるので、ビニールハウスを作成。安心で安全な水耕栽培でレタスやトマトなどを栽培している。管理は「オクイテクノス」に依頼。

ビニールハウスの脇には手作りのピザ釜

もあり、定期的にバーベキューなども行われて社員とのコミュニケーションの場にもなっている。



私自身が色々なことに興味を持つタイプです。社員に対しても、興味を持ったことにはたとえ失敗してもトライしてもらいたいですね。チャレンジする気持ちを忘れずに、常にアンテナを張って欲しいと思っています。

社員一人一人が何事にも興味を持ち、“志と夢の実現”のために自ら考え、自ら行動していく、そんな主体性を兼ね備えた『自立人間』を目指していく…フレキシブルな感覚を身に付けるため、何事にも興味を持ってチャレンジ精神を養って貰いたいですね。



株式会社 奥井組 概要

創 業 1954年5月（法人設立1966年2月）
資 本 金 9,800万円
売 上 高 24億6千万円（2016年8月期）
従 業 員 135名
本 社 〒358-0055 入間市新光191番地1
電 話 04-2931-1091（代表）
ホームページ <http://www.okuigumi.co.jp/>
取 引 店 入間支店



本社・入間トラストセンターの全景